

地域や行政と共に取り組んだ公園作り

石井 信子
千葉市立扇田小学校

1 はじめに

平成11年4月、都市基盤整備公団から「子供のアイデアを生かした公園作り」の話が舞い込んで来ました。公園予定地は、学園前駅の側、4000㎡の雑木林です。学校から徒歩10分ぐらいのところにあります。この1年のうちにアイデアを出し、秋には工事を開始し、翌年の春には完成したいという日程でした。5年生を中心に、全校児童、そして地域の人たち、行政の人たちと共に公園作りに取り組みました。その様子を紹介します。

2 活動のきっかけ

公園作りは5年生の子供たちを中心に全校児童と地域、行政と共に取り組んだ活動です。活動のきっかけはこの活動を行う前から都市基盤整備公団といくつかのつながりがあったからです。例えば、開園前の大百池公園に学習のため使わせてもらっていたり、4年の学習で「街作りフォーラム」を開いたとき、来ていただき意見交換をしたり、つながりを作っていました。もう一つ理由を考えると、開校4年目の扇田小学校が開校当初から心がけていたこと、「地域に開かれた学校」ということで、地域教材を生かした教育、地域の方も参加しての教育、地域に出ていっての教育を進めていたからではないでしょうか。学校の中には、新しいことを積極的に取り入れていこうとする前向きな姿勢が教師の中に見られました。公園側でも子供のアイデアを取り入れた公園作りの提案は、若い人から出たことだと聞いています。今までなかったことに取り組むときには、大変な苦労が待ち受けていることは覚悟しなければなりません。お互いを信じ、協力し合って進めると本当に素敵なことができます。公園作りは、

子供ばかりでなく私自身に大きな学びがあった活動でした。

3 活動内容

3.1 子供の願いと教師の願い

子供たちはいろいろな願いを持ち、新しい公園作りに強い興味を示しました。教師の願いとしては、この公園予定地が生き物がたくさんいる雑木林だったので、自然と共存した公園にしたいということまた、公園作りを通していろいろな立場にたつて物事を考えるようになってもらいたいこと。さらに自分の考えをしっかりと持ち、相手の考えをよく聞き合意形成をしてもらいたいこと、社会参加のプロセスを体験してもらい、自分も社会の一員であることに気づいてもらいたいなどよくばりな願いをたくさん持っていました。この活動を通して子供たちがこのおゆみ野を好きになってもらえたらこんな素敵なことはありません。

教師が「自然と共存した公園を作りましょう」と言ったところで、子供自身がそう考えてくれなければ押しつけの何物でもありません。そこでまず初めにしたことは、予定地の自然や地形をよく知ってもらおうと「フィールドビンゴ」をしました。子供たちは自然がたくさんある雑木林で、夢中になってビンゴをしていました。いえ、いつしかビンゴではなく自分の興味におもむくまま、桑の実を食べていたりつるにぶら下がって遊んでいたりと、蛾づかを見つけて騒いでいたりちっとも飽きた様子を見せませんでした。もしかしたら、これが本来の子供の姿なのかもしれません。「野性動物としての人間」の遺伝子が目覚めたのかもしれない。

ビンゴを終えて教室に戻ってから、個人で「生き物マップ」作りを、その後全員で大きな紙に

「生き物マップ」を作り分かち合いました。そして、この公園予定地の気になったところや気になるところをブレストリングで出し合い、個人で公園の第一回目のアイデア作りをしました。多くの子が、キーワードに「自然を残したい」「自然を生かして」「生き物いっぱい」などと書いていました。子供が自ら五感を通して感じ考えたことを大切にしました。



写真1 公園予定地でビンゴ

3.2 全校へ地域へ発信、情報収集

「公園は子供たちだけのものではない」このことは、千葉市公園管理課の方から配慮するよう言われていたことです。子供たちにこのことを話すと、全校児童ばかりでなく地域の人にもアンケートをとりたいと言い出したので、子供たちでアンケート文を作り配布、回収、集計をしました。さらに公園作りをアピールするために何ができるか話し合い、全校朝会で劇で説明したり、校内放送、学校や地域に「公園新聞」を配布、校内に「公園コーナー」を作ることにしました。子供たちは、何回も話し合いを重ね、いろいろなアイデアを出してきます。教師はそれを出来るだけ生かす方向に支援していったのです。子供も教師もわくわくしながら活動を進めていきました。今までの学校の学習は、「場」も「時間」も「内容」も制限を受けながらやってきました。ところが、総合的な学習の時間は、子供の学びの広がり、深さを求めてその制限を乗り越えていくことができるので

す。こんな楽しいことはありません。

3.3 いろいろな立場にたって

いろいろな立場に立って物事を考える、簡単そうではなかなかできません。そこで教室で、ロールプレイやディベートを通し体験する活動を取り入れてみました。ロールプレイでは、実際の公園作りと同じようにある土地をどのように使うのか、建設会社や自然保護団体、子供のための運動場を主張する少年運動団体、市民に分かれ討論会をしました。子供たちは自分たちの役割に徹しながらいろいろな人にリサーチをして、討論にのぞみました。終わってからの感想では、「私は自然をそのままにしておくのが一番いいと思っていたけど、子供の健康を考えた運動場もいいなと思うようになりました。」と書いていました。子供たちは実際の公園作りにおいても、いろいろな情報を手に入れていましたから、それらを生かしてアイデアを作ろうとしていました。「キジたちのために水飲み場の池はあったほうがいいと思う」とか、「体の不自由な人のためにスロープは、あったほうがいいね」「お母さんたちの意見も入れたほうがいいよ」など、何度も話し合いを重ねました。



写真2 ロールプレイで話し合い

3.4 合意形成

子供たちは、6つのグループに分かれ合意形成をしていきました。これはとても苦しい作業です。「あなたたちだけの公園ではない。多くの人の意

見も取り入れなければならない。しかし、その辺にある公園と同じでは困る。あなたたちらしさを出したのを作ってほしい」こんな無理な注文を教師は出しているのです。この作業で私が強く言ったことは、「多数決では決めないこと、少数意見を大切にすること」ということです。子供たちは、このことをよく守って話し合いを進めました。もちろん簡単に進むわけがありません。けんかがあったり、活動が低迷したり、リーダーがやる気を無くしたり大変でした。そのたびに個人的に支援をしたり、励ましたり、しかったり、「振り返りカード」で心の中を見つめる活動したり、いろいろな手を打ちました。また、大人の人にも話し合いに参加してもらいました。「スーパーアドバイザー」という形で、公園、公園管理課、造園会社の方々です。子供たちには納得するまで、妥協してはいけなくて話していましたから、けっこう対等に話し合いをし、自分たちの考えをはっきりとしゃべっていました。なんとか自分たちのグループのセールスポイントを取り入れてもらいたいという思いが強かったからでしょう。



写真3 アイデア発表会

3.5 全校で取り組んだ参加メニュー

子供たちのアイデアを大人たちが真剣にうけとめてくださり、多くのアイデアが取り入れられました。「この公園のためなら、何でもするぞ」という気持ちでいっぱいです」と子供たちは感想に書いていました。私もこんなに採用されるとは

思ってもいませんでした。「世の中甘くないからね。みんなのアイデアのうち一つか二つ採用されればいいほうかな」と子供たちに話していたくらいですから。最初の活動から常に関係者の方々が入り込んで、子供と共に一緒に参加して下さったことが、子供の願いを大切にしてくださったことにつながったのではないかと考えています。

このプロジェクトも5年生の活動からいよいよ全校に渡していく時期になりました。児童会、委員会、各学年にと参加メニューを振り分け、全校で取り組むことにしました。先生方の協力なしでは進みません。全体の指揮を私から教務に代え、全校で取り組むという姿勢を出しました。

3.6 おゆみ野ふれあい公園

平成12年3月にみんなで名前をつけた「おゆみ野ふれあい公園」の開園式が行なわれました。自分たちのアイデアがたくさん詰まった公園、自分たちで作ったトーマスポールや巣箱、落ち葉のプールで子供たちは本当に楽しそうに遊んでいました。

公園を作るまでは、楽しいので子供たちも盛り上がりませんが、大切なことはこの公園を維持管理していく地味な活動をどのようにしていくかということです。公園の花壇とトンボ池の運営管理は学校に任せられました。そこで、子供たちと話し合い、公園委員会を作ることにしました。また、地域に呼びかけ「花ボランティア」を募集することにしました。春先から夏場にかけて水やりや清掃を委員会や各学年が交代で行ない、地域の方も協力して下さり乗り越えました。地域のおばあちゃんたちからは、花の苗の提供もあり本当に助かっています。地域の人とふれあいながら花の世話をしたいと願った、5年生の子供たちの考えが実現したわけです。

子供たちは公園のこととなると、本当に自ら動き出します。公園がゴミで汚されている、貝塚が壊されているというこまった事態に、彼らは何時間も話し合い、行動に移しました。ポスターを作ってお店や駅に貼ってもらったり、劇で全校児童に訴えたりしました。さらに、近隣の小学生と公園

清掃などをして交流をして、公園を大切に作る気持ちを伝えたいという声からあがってきたので、11月に交流学習を実施しました。

4 まとめ

公園作りを通して、確かに子供たちの中に地域を愛する心が育ってきていると感じます。多くの方との関わり、さまざまな体験を通し、教科書では学びきれない生きた学習をしてきたのではないかと考えています。多くの大人の暖かい支援が、子供にやる気と自信を与えてくれました。地域と学校そして行政が手を組み子供たちの学びを作っていたことが、どんなにか子供たちの学びを広げ、深めることになったかしれません。これからの教育は、学校が開き、教師や地域の大人たちが心を開き、ネットワークを組み合わせながら教育を作り上げていくことが、とても大切なことだと思います。



写真4 落ち葉のプール

限らない学びの可能性は、そんな柔軟な考えのもとに、また、共に学んでいこうとする大人たちと子供たちの中から生まれてくるのです。「楽しくなければ学校じゃない」を合い言葉に、教師が楽しみながら、子供と共に成長していく、そんな気持ちで総合的な時間の学習を進められたらどうでしょう。それにはまず、教師自身が出会いを求めて心を開き、飛び出していくことです。

5 現在のおゆみ野ふれあい公園、そして学校ビオトープ作りへの発展

現在、ふれあい公園は、「公園委員会」の児童と地域の方のボランティアのメンバーが中心となり、花壇の花の世話やトンボ池の世話、ゴミ拾いなどを自主的に行っています。委員会は4年生以上で構成されていますが、週一回必ず公園の清掃などを行っています。

5月の全校遠足では縦割りのチームで、ふれあい公園で遊んだり、お弁当食べたり楽しく活動する姿もみられました。また、夏の花壇の水やりも子どもたちと保護者が交代で行い、今もきれいな花を咲かせ手います。生活科の学習や国語の俳句作りなどにも公園を活用することもあります。ふれあい公園は地域の方々と共に、「ふれあいの場、学びの場」であり「地域を大切に思う場」でもあるのです。

13年度から全校児童と地域の方々、専門家やNPOのかた方と校内にビオトープ作りが始まりました。「昔のようにメダカやカブトムシのいる自然を取り戻したい」「生き物が移動できる自然を再現したい」という子どもの声から活動が始まったのです。「自然との共存」を考える活動がまた続けられています。ふれあい公園で育ったトンボが扇田小のビオトープにもやってくる、子どもたちとその目を楽しみにしながら活動しています。



写真5 公園委員会の活動